



## うきは出身の新選組隊士 篠原泰之進

令和2年度から始まった耳納風土記も今年で3年目を迎えました。令和4年度1回目の今回はうきは市出身の新選組隊士を紹介します。浮羽町高見出身の篠原泰之進は、新選組として活動した期間は短いものの自分の信念に従い様々な組織を渡り歩き、幕末から明治維新の動乱の時代を最後まで生き抜きました。

●問合せ 生涯学習課文化財保護係 ☎75-3343

### 1. 久留米藩から新選組に入隊するまで

篠原泰之進は浮羽町高見の石工、篠原元輔の長男に生まれます。幼少より剣術や柔術を学び、久留米藩家老有馬右近に奉公します。安政5年(1858)に有馬に従い江戸を発ち、尊王攘夷※1派の志士と交流を図る中で、万延元年(1860)有馬藩を脱藩します。縁あって神奈川奉行所の外国人居留地警備に雇われます。この折、イギリス人3人が幕府の役所に乱入して乱暴を働き、これを締め上げた篠原らは逆に外国人への暴行の嫌疑を受け横浜を脱走します。この頃、のちに新選組参謀となる水戸藩の伊藤甲子太郎かしたろうとも出会い、伊藤とともに新選組に入隊することを決意し、江戸を発ち、京都へ向かいました。

### 2. 新選組としての活動、その後の脱退

新選組隊士となった篠原は諸士調役兼監察、柔術師範として活動します。新選組も尊王攘夷を主義とする集団ではありましたが、その活動は市中見回りや不逞浪士の取締りなど幕府とのつながりの強いもので、元々勤皇の志が強かった伊東・篠原らは新撰組の活動に疑問を持ち、話し合いにより脱退します。その後、伊東をリーダーとして篠原ら15名は天皇の墓を守る御陵衛士の高台寺党を結成します。円満な脱退かと思われましたが、伊東は新撰組により暗殺され、遺体を引き取りに行った篠原ら同志は、待ち伏せしていた新選組に襲われます。これが油小路事件あぶらのこうじじけんと呼ばれる新撰組最後の内部抗争です。藤堂平助ら同志を失いながら九死に一生を得た篠原は薩摩藩邸に逃げ込みました。その後、篠原ら高台寺党の生き残りは伊東の仇を打つべく局長 近藤勇を襲撃し、重傷を負わせます。

### 3. 新政府軍として戊辰戦争に参加

近藤勇襲撃の頃から父の姓の秦を称し秦林親と名乗ります。農民部隊の赤報隊として活動、一時は投獄されるも処刑寸前で出獄し、朝廷より軍曹に任ぜられ、北越戦争・会津戦争に参加します。明治元年(1868)京都に凱旋した後、明治2年(1869)久留米藩主の依頼で製作したライフルロケットの試射を兼ねて10年ぶり

に帰郷します。この時に久留米藩は秦(篠原)を藩士に登用しました。この折、秦は両親の墓と追弔碑を浮羽町高見の篠原家墓地に建立しました。追弔碑に書かれていることを現代風にするならば「父母は生きている時、常々武をもって名を挙げ、木石のごとく朽ち果てるなど自分を励ましてくれた。これにより自分は発奮して諸国を周遊すること十余年、明治元年に朝廷より軍曹に任ぜられ、会津・北越戦争へ向かい、わずかではあるが功を挙げることができた。これは朝廷の恩によるものでもあるが、父母の教訓の賜物である。今、名を挙げ故郷に帰ってきたが、この喜びを伝えるべき両親はすでに世を去っている。よって以下の言を石に刻み、これを父母の墓の側に建て、自分の感謝の気持ちを両親に捧げる。」となるでしょうか。

### 4. 晩年

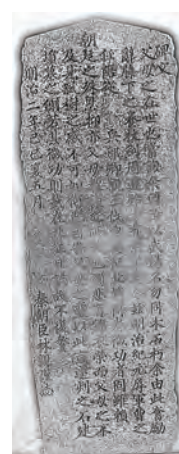
帰郷後、関西へ戻った秦は京都支台などの官職を歴任し、辞職後は蒸気船購入の仲介・鉱山業・林業などの事業をはじめ忙しい日々を送ります。

晩年は東京に移り、二人の子どもの成長を楽しみに静かに余生を過ごしたようです。今から111年前の明治44年(1911)、84歳で生涯を閉じました。秦林親の墓は東京の青山霊園にあります。

(※1) 天皇を尊び、外国を追い払う攘夷が結びついた思想



篠原泰之進両親の墓



追弔碑拓本